コチドリ

Charadrius dubius

チドリ科・夏鳥

コチドリ

名前の由来
チドリの中では小さいのでこの名がついた。チドリの語源はその鳴声からきたという説がある。漢字名：小千鳥

特定種

該当なし

形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）16cm。頭部に白と黒の模様があり、前頭部（おでこ）の黒と頭頂の褐色の間に白い部分がある。目の周りにはっきりと金色の輪がある。体の上面は砂褐色。翼に白帯は全くない。足は黄色。

声：「ピォ、ピォ、ピオ」あるいは「ピピ、ピピ」と鳴く。繁殖期には巣の近くやなわばりの中を「ピッピッピッ（ピオ、ピオ）ビュー、ビュー」「ピピピピピ、ピピ、ピィョ、ピィョピィョ」などと鳴きながら飛び回る。

類似種と見分け方：イカルチドリ。
イカルチドリの方が少し大きくて、目の周りの黄色が淡い。またイカルチドリのくちばしは長く、顔の黒色は淡くて、足の色も淡い。飛んでいると翼に淡白色の帯がみえるのもイカルチドリの特徴。またイカルチドリは「ビュービュー」と聞こえる声は出さないという。

コチドリ。顔の黒白模様と目の周りの金色が印象的

類似種、イカルチドリ。目の周りの黄色や黒色が淡い

生息環境・分布

河川敷地内の中洲、水辺、河口の三角州や干潟、海岸の砂浜、植生が疎らで裸出土の多い荒地などに生息する。
水辺に多く、砂泥地や砂礫地を好むが、必ずしも水辺である必要はなく、どこか近くに水域があればいいとも言われる。

分布：ユーラシア大陸の低・中緯度地方に広く繁殖分布し、同大陸南部からインドやアフリカ大陸中部に渡って越冬をする。
国内では北海道、本州、四国、九州などに夏鳥として渡来して繁殖する。九州以南で少数が越冬する。
北海道では夏鳥。繁殖する。主に河川の中・下流部の河川敷に生息する。
十勝地方では夏鳥として４月に飛来し、繁殖する。河川の中下流部の河川敷で普通に見られる。

食性・他生物との関わり

砂泥地に生息する昆虫類などの小動物を食べる。砂地を急速に走って急停止し、思いがけない方向にくちばしを突き出して虫を捕る。走る方向を急に変えて進むのでジグザグに進むように見える。ぬれた泥の表面を片足でたたいて虫を追い出す行動も見られるという。
捕食者は猛禽類やキツネなど。

河口部の湿地で餌を捕るコチドリ

生活サイクル

	１月	２月	３月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月
十勝出現期						繁　殖						
九州以南（越冬期・通年）												

繁殖生態

繁殖期は4月～７月。一夫一妻。オスは河原などの砂礫地に直径10mくらいのなわばりを持ち、他のオスにたいして脅しのディスプレー（誇示するための行動や動作）や、上空を広めに「ピウー、ピウー」と鳴きながらチョウのように旋回するフライトディスプレー(飛びながら行う誇示行動)を行う。（→興味深い話の項参照）

メスは複数のオスを訪ね、オスは訪れたメスに求愛ディスプレーを行う。巣作りの場所に足や体でくぼみを作りながら「ピッピッピッ・・・」と呼びかける。メスが動かないときには場所を変えて繰り返すという。（興味深い話の項参照）

巣は砂地にオスメスで浅いくぼみを掘り、内装に小石や貝殻の破片や植物片などを敷く。環境によって巣材が使われない場合もあるという。

３～５個の卵を産むがほとんどが４個で、巣の中に十文字に並べられているという。オスメス交代で卵を抱き、22～25日でヒナがかえる。ふ化後半日ほどで巣を離れ、両親の世話の下ヒナは育つが、ヒナは初めから餌を捕るという。ヒナは25～27日位で親から独立するという。

ヒナがそばにいるため、擬傷（ケガをしたふり）するコチドリ

興味深い話

■草や枝などの巣材を使わず地面に直接卵を産む。卵は砂礫地の小石とそっくりで非常に見つけにくい。捕食者が卵や雛のいる巣に近づくと、親鳥はケガをしているフリをして自分に注意を引き付けて捕食者を巣から遠ざける擬傷行動を行う。

■走る方向を急に変えて進むのでジグザグに進むように見える。「千鳥足」の語源。

■オスのなわばりでのディスプレー（誇示のための行動・動作）には空中を「ピウー、ピウー」と鳴きながら旋回するフライトディスプレーの他に地上部での対立行動もある。背面の羽毛をなでつけ、脇の羽毛を水平に逆立てて、体を水平にして平行に走ったり、突進したりするものと、首や頭頂の羽毛を逆立てて体を起こしてにらみ合うものがあるという。

■オスのメスに対するディスプレーは、巣作り場所として紹介する場所でうずくまり胸を地上に押しつけ足で砂を蹴飛ばし、体を回転させてくぼみづくり（スクレイプ）を行いながら「ピッピッピッ・・・」と鳴くものである（スクレイピングディスプレーと呼ぶ）。メスが動かないと場所を変えて繰り返し、メスが近づくと、くぼみの縁につま先立ちになり、体を水平にして尾羽を扇のようにくぼみ上に開く。メスはその尾羽の下にうずくまったり足で掘る仕草をしたりするという。つがいづくりの時だけでなく、交尾や巣作りの時にもこのディスプレーが使われるという。

■ヒナの頭や背は白色・黄褐色・黒色がまばらに配置された羽毛をしていて、危険を感じてうずくまると周囲の小石の中でよい保護色となる。

■親鳥はオスメスとも擬傷行動（翼を大きく開き引きずるように歩く）を激しく行う。敵をおびき寄せるためだともいわれている。

湿地を歩くコチドリ。両足を交互に出して素早く、またジグザグに歩く

配慮事項

砂泥地や砂礫地など植生が少ない土地を好むため、氾濫原などの変化の激しい不安定な環境が必要。

参考文献

「山渓カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と渓谷社 1985（1995 ２版21刷）

「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂２版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000

「野鳥ブックス－２ フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982（1994 増補版７刷）

「野の鳥の生態 復刻版 １～５巻」仁部富之助、大修館書店 1979